

令和6年度第1回 ひきこもり支援協議会 議事録
(主要な質疑応答及び結果)

開 催 日 時	令和6年7月31日（水曜日） 午後6時30分～午後8時40分
会 場	本庁舎 5階 507・508号室
出 席 者	【委 員】文京学院大学人間学部人間福祉学科 教授 中島 修、 東京学芸大学教育心理学講座 教授 福井 里江、 NPO KHIJ 全国ひきこもり家族会連合会 事務局長 上田 理香、 株式会社 Meta Anchor 代表取締役 山田 邦生、 櫻和メンタルクリニック 院長 山野 かおる、 池袋市民法律事務所 所長 釜井 英法、 高齢者総合相談センター（包括）中央高齢者総合相談センター長 澤口 清明、 豊島区民生委員児童委員協議会 会長 山本 ナミエ、 小杉 順二、瀧本 裕喜、池袋保健所保健予防課 精神保健係長 漆山 友美子、 東京都 福祉局生活福祉部生活支援担当課長 山川 幸宏、 豊島区 福祉部長 田中 真理子 【オブザーバー】NPOインクルージョンセンター東京オレンヂ 三浦辰也、甲斐正大、仲俣実穂 【事務局】豊島区 自立促進担当課長 水上 千春
傍 聴 者	なし
会 議 次 第	開会 1 挨拶（田中部長） 2 会長の選出、副会長の指名 3 自己紹介 4 都のひきこもり支援の動き、取り組みについて【資料3】 5 区のひきこもり支援について【資料4-1、4-2】 閉会
資 料	・ 次第 ・ 資料1 ひきこもり支援協議会設置要綱 ・ 資料2 委員名簿 ・ 資料3 都の令和6年度ひきこもりに係る支援事業の取組について ・ 資料4-1 ひきこもり支援3年間のまとめ ・ 資料4-2 ひきこもり相談窓口3年間の実績まとめ ・ 参考 座席表 ・ 参考 ひきこもり相談窓口周知チラシ・リーフレット・カード

主要な会議内容及び質疑応答について

開 会

1 挨拶 田中部長

2 会長の選出、副会長の指名

- ・ 会長 文京学院大学人間学部人間福祉学科 教授 中島 修
- ・ 副会長 東京学芸大学教育心理学講座 教授 福井 里江

3 自己紹介

4 都のひきこもり支援の動き、取り組みについて【資料3】

（委員）概要について説明

- ① 今年度の東京都におけるひきこもり支援の取り組みについて
- ② ひきこもりの認識に関する世論調査の結果について

（会長）ひきこもりに理解関心のある方の割合は非常に高かったという印象。

（委員）東京都の世論調査で、ひきこもりが誰にでも起こりうると考えている方は今まで以上にいた。一方で、私は甘えていたり、働かないことが問題であったり、つらい経験の有無というのも結果があったと思う。本人がどんなつらさを抱いているのかというのは、これからなのだろう。ひきこもりがだいぶ浸透してきていることが全体的には感じられた。注目したのは、家族に相談した人が多いという点と都政の要望。継続的なサポートというのは、「何度でもお話をお聞きします」と書かれているリーフレットとリンクしていて、辛いときほど誰かに話したいと思うわけで、継続的というのを示す意味は本当に大きいと思う。

（副会長）私もこのひきこもりが誰にでも起こりうると答えた方が72%というのは驚きで、こんなに共感している方がいるのかということを受け止めた。一方で、甘えている、働かないことが問題だという回答も一定数あったというのは、自分だってそういう辛さを抱えて頑張っているのに、なぜそうしないのかという、複雑な気持ちもあるような気がする。それだけ世の中全体に辛さを抱えている人がたくさんいるということかもしれない、今ひきこもり状態にある方だけが救われるのではなくて、社会全体が生きづらい状況にある中で、社会全体が救われるように、社会が変わっていくということも一緒に考えていく必要があるのではないかと感じる調査結果だった。

（会長）皆様から何か気になった点等があれば、1人2人ぐらい。

（委員）自分の経験上、ひきこもり状態になるきっかけは、お金がなくて、仕事をしていなかったのも、ひきこもり状態のときは収入がなく、外に出るときの洋服がないとか電車賃がないとか。だから人に会うことができないので、友達が全くなかったり、何とかしようと思ったのに先送りしてしま

い、今日はやめて明日にしようと、どんどんひきこもりの状態に入ってしまったので、もちろんいじめ、ハラスメント、病気は複合的にあると思うが、金銭的な問題もあると思った。

(委員)「甘えている」という 15%のことで、子どもを説得しないと駄目だと感じられている父親が多い気がする。「今はスマートフォンもあって情報収集しやすいのに、どうして頑張らないの？」と父親に言われてしまうと、何も言えない。親の世代が高度経済成長を支えてきたのは理解できる。でも今は終身雇用が崩れて、正規社員になるのは難しいと思う。

(委員) 私も、「働かないことが問題」という点が気になったが、診療所にいらっしゃるご家族をみていると、父親は子どもについて理解するのが難しいことが多いと感じている。子ども自身が今の状態に至ったストーリーを理解してもらうために、時間をかけて、父親自身が「そういうことか」と気付く瞬間を待ちながら、話を伺うようにしている。こちらからあれこれ何か働きかけるよりも、父親の話を聞いていくことで、気付きに至るプロセスが必要だと思っている。そのことと関連して、世論調査の「ひきこもりに関する周知・啓発/ひきこもりに関する支援」のところで、「ひきこもりの理解を深めるために効果的な広報内容」への回答として、「ひきこもりの状態になる背景や要因」と答えている方が多かったが、普段、子どもとの関係に困難を抱える保護者や関係する大人と接していると、子どもの置かれた状況の背景や成り立ちがわかると子どもの状態や気持ちを理解しやすいと実感している。この回答結果を大切に生かしていただければと考えた。

(会長) 父親の気持ちを受けとめるのはとても大事である。

(委員) 今のひきこもりという状態の印象を考えて、甘えていることに関してのコメントをいくつかいただいたが、詳細を申し上げると、今でも父親しか出てこなくて、母親が出てこない。調査結果を見ても、やはり男性の方が甘えていると言っている人が多い。職層でいうと、経営管理職者層で 20%を超えている。やはり皆様が今、印象等を持たれているのが数字としてもある程度見えると思う。また、副会長がおっしゃった、「甘えている」の中には、30 代男性も 22.5%いるので、やはりご自身は頑張っているのになというふうなお考えがここに入っている部分もあるのかと思った。2 月 29 日にプレス発表をし、東京都ホームページにも出ているので、もし興味があれば、細かいデータもあるので、参考にいただければと思う。

(委員) 調査結果を見ていて、周りの人がどう思うかという点で、甘えに関しては、私の親もそのようなことを言っていた。私は事業を 2019 年に始め、親に言ったら絶対失敗するというようなことを言われた。実際にやってみるとできるが。周知の点で、やはり人間は未知のものに対して怖さがある。障害については、障害者雇用もあるし、パラリンピックや障害者 e スポーツなどもあり、一般的になっているが、ひきこもりは全然一般的ではない。しかも目に見えないので、非常にわかりにくい。私も友人がひきこもっている時はわからなかった。ひきこもりは福祉医療の分野からでないとなかなか一般層への理解が難しいとされていて、今企業にひきこもりの方を紹介しているが、意外とできる人はいっぱいいる。ただ、10 年間ひきこもっていると、その期間に弾かれたりするので、そこを変えていかないと、やはり社会は変わらないところがあるので、そこに今チャレンジしている。彼らでもできることがいっぱいあるというのをもっと発信したい。ただ、我々のマンパワーが

足りず、力がないので、非常に頭を抱えている。メタバースやテクノロジーを駆使していれば、もしかしたら何かすごいことができるし、別にその場に行かなくても働くことができるし、もっと何かできることはあるのではないかと思った。

(会長) いろいろと意見が盛り上がってきたところだが、次の区の支援の話を伺ってから、また議論していきたい。

5 区のひきこもり支援について【資料4-1、4-2】

(事務局) 概要について説明

(会長) 支援者が追いつけないという意味でも、きちっと終結がわかるところは1回終結することが大事だと思う。説明が終わったが、いかがか。

(委員) 継続は力なりという気持ちで携わらせていただいた。広報は今のが一番好き。豊島区の状況を見ると、単独世帯の割合が64%と、都の平均と比較しても高いというのが特徴だと思うが、もう一点、豊島区の傾向に全国の実態調査の傾向も近づいており、当事者の年代が50代60代で大体半数近くを占めている。実はKHJの実態調査も昨日公表されたが、平均年齢が43歳。ひきこもりは中高年の課題だとひしひしと感じていて、もちろんそれだけ若年の資源や選択肢があるということでもあるが、豊島区に質問したかったのは、何を相談したいと思っているのかという点。実績の2ページ目は家庭問題が令和5年度は一番多い。親と子の考え方の違いや距離の保ち方などに苦慮していると書かれているが、やはり家庭問題というのはここに尽きると感じていて、この事例を読む上でも共通して見えている。相談に繋がったきっかけに、家族の変化があって、特に②も③も兄弟が心配して相談に繋がったとある。もう一つはこの③の50代男性の事例もそうだが、母と2人きりの生活でささいなことで口論になりやすいという。家族は一緒に住んでいて、もうそれだけで生きるエネルギーが取られてしまうということがあるので、だからこそ家族会は家族のメンタルがとても重要だと思って実施している。先ほど終結の中にも家庭問題の改善が理由にあったようで、この家庭内の関わり、単身世帯が多いとそこの兄弟との関係があって繋がったり、いろいろ繋がり方や今後の豊島区がどこに相談の中心を持っていくのかということ聞かせていただければ。こういった50代60代への関わりや、今後どういう資源に繋げていくのか。40代女性の事例でいうと、自身の特性をつかみ、短時間のアルバイト開始と書いてある。特性を理解してもらうことは何か、しかも短時間はどのくらい短時間なのかとか。やはり柔軟にその人1人1人に合わせたものが、本人のこれからの生き方を応援することになっているのではないか。40代女性の事例でとてもよいと思ったのは、日常生活の出来事を中心に継続した面談を続けているということ。私も40代女性の相談を3年以上続けているが、日常生活の何気ない話ができたり、関わり続けるということ、究極は味方になっているし、味方になってくれる人が欲しい。なんで私が悪いのとみんな私を責める、私が間違っていると言う。でもそこに理解したり味方になってくれる、何かそういう叫び声が聞こえたりもして、今回の「あなたらしさ、否定されないで応援します」というのは、とても肯定的に事例も受け止めさせていただいた。

(会長) 大事な内容をたくさん盛り込んでいただいて、まず本人からの相談が多いということや、継続的な相談の大事さを言っていただいて、この豊島区の相談窓口の特徴だと思うが、非常に継続的な相談を受けやすくしているということと、終結の部分、それから家族との関係の問題、あるいは出口の問題で短時間のアルバイトとか、いくつかそういう要素をお話いただいた。

(委員) 家族から本人に繋がった人も多いというご報告だったと思うが、どのぐらいの方がそういうきっかけがあったのか知りたい。

(相談員) 家族が継続的に窓口に来られる方は、本人と話せたり、一緒に来られたりという割合が多い気がする。ただそういうことが全然できない、本人のことを話せないという家庭だと、家族の相談自体が減ってしまうこともあり、繋がりがづらいこともある。先ほどの短時間の就労だと、この方に関しては週4日の2時間か3時間からだったと思う。最近私が記憶している限りで支援している方だと、週3日3時間の仕事を始められ、続けられている方もいるし、週1日1時間だけの仕事を見つけてきて、それをやろうと話をされている方もいる。就労支援を直接やっているわけではないので、ご本人が見つけてきたものや、探してみようという話がある。

(委員) ご自分で見つけてなのか。

(相談員) はい。それか就労支援や、ハローワークの窓口で見つけ、こちらはそれを聞きながら雑談をして、ほかの窓口やくらし・しごと相談支援センター、ハローワークを紹介ということもある。

(会長) 4階のワンフロアでつながっている。

(事務局) くらし・しごと相談支援センターは隣の窓口で就労準備支援をやっているの、一体支援で連携を密に取りながら、希望される方はすぐ対応できるように行っている。

(委員) 相談事業について、相談に来る方は基本的に豊島区在住の方なのか。

(事務局) 基本は豊島区在住の方だが、例えばその母親が区外にいらしても、本人が豊島区にいらしたり、もしくは家族が豊島区にいらしたりと何らかの形で区との関わりがあれば相談を受けている。

(委員) 豊島区ではない方からの相談もあるのか。

(事務局) たまにある。窓口でまずお伺いして、その場でお話を伺うことだけ是可以。例えば就労支援や具体的なケアまではできないが、話を聞くとところまではできるという形で、できるところを相談員が対応している。

(委員) 東京は都会なので雑踏に紛れるわけではないが、田舎だと自分が住んでいる地域にはほぼ相談に行かない。家族も含めて。そういう相談を我々が受けたりすることも時々あって、我々は専門家ではないので、どういう状況を聞きながら、打てる手を伝えたりする。自分で言える人はよいと思う

が、それすらもできない人が多いという印象で、ひきこもってしまうと、もう全てをシャットアウトしてしまう。その時に自分でも動けなくなってしまう問題があって、そうなる则相談もできない。東京都のアンケートだと、家族や医療とか友人に相談すると書いてあったが、ほとんどそれができない。つまりそういう人たちをどうやって巻き込んでいくかというのは課題があり、連絡しても反応がないし、こういうイベントがあると個別に送っても、連絡が来ないこともあるので、やはり難しいと感じている。私は今 COMOLY で毎週火曜日の 20 時から模倣会というのをやっており、そこに毎回来る人は来るが、声をかけても来ない人は来ない。そこをどうやって繋げていくのかというのは難しいし、オンラインでも参加しないという人も多いので、何かしら突破口があると思って、今いろいろと動いている。

(会長) もう完成も間近の 3 年間の報告書について、豊島区は地域の取り組みを頑張ってやった。民生委員・育成委員の皆さんに向けてやったこと等を何か載せてほしいと思っている。豊島区の良い取り組みなので。ひきこもりのことを地域の人と一緒になって考えて、それを区職員が説明に回っていた。素晴らしいなと思い、大幅な変更はしなくてもいいのでどこかでうまく入れ込んでほしい。

(委員) 重複するかもしれないが、新規相談者が令和 5 年度だと 122、継続相談者が 33 ということは、1 回きりで終わってしまうという方がかなりいらっしゃるということなのか。

(事務局) ひきこもり相談窓口でどんなことをやっているのかという相談や、合わないと思って相談をやめられる方もたくさんいると聞いている。

(相談員) 1 回きりもちろんあるし、合わないということもあるが、1 ヶ月とか 2、3 ヶ月何となく相談をされるけれども、そこからフェードアウトした方というのが一定数おり、年度をまたいでの継続にはなっていない状況。

(委員) そういう方たちは再度フォローするようなこともしていないのか。

(相談員) フォローをしているため、2、3 ヶ月は割と繋がることが多い。数週間ぐらいあいたら、こちらから電話ないしメールで連絡しているため、それに対して返答があれば続いていくが、電話に出られなかったり、メールしても返ってこなかったりすると、数ヶ月で一旦終わりで、また連絡があればよいと願って、終わることもある。

(委員) あまりしつこく言うのもあれだし、難しいところ。できれば新規で来た方が継続的に自立の道に繋がっていければよいと思う。

(会長) 先ほどひきこもりの問題は中高年の問題ではないかと話があった。だんだんと年齢が上がってきているところだが、東京都としても豊島区としても肌感覚で感じておられると思うが、いかがか。

(委員) その前に、皆さんのお話を聞いて、我が事として考えたときに思うところがあったので、そこから一つ質問したいことがある。世論調査の結果で、誰にでも起こりうるという理解のある方が 72%だ

ったが、一方で説得にかかろうとする父親の話が出たと思う。これはその危うさを自分が持っている、ちょっとぞっとしてしまった。自分の息子が仕事に行かなくなったときのことを今イメージしていて、自分は説得にかかるなと思った。つまり、父親も誰にでも起こることなのではないかと思う。認知症のことは誰にでも起こりうるという話をよくしており、この辺はだいぶ浸透してきている。それはなぜかと言うと、そういう話を広報でするだけでなく、疑似体験できるようなツールが確立している。例えば、手足に重りをつけて、曇ったゴーグルをつけて、見えづらさや歩きづらさを体験するだけではなく、今は VR を使って、認知症の方がどうして徘徊をしてしまうのかを疑似体験できるようなプログラムがある。そのようなことで理解が少しずつ進んでいっていると思う。ここで質問だが、父親が学習できるような、そういうプログラムみたいなものは、こちらの業界ではあるのか。

(委員) 親の学習会を、月に 1 回、楽の会リーラでやっていて、そのうち父親は 1 割いるかいらないか。KHJ の副理事長 池上正樹というジャーナリストがいるが、父親が一番びびる言葉があると言っている。我が子を完全否定している父親に「やばい」と思わせるには、「子どもが事件を起こしますよ」という言葉だ。要はどれだけ父親の現状がリスクをはらんでいるかということ父親に言うのを耳を疑う。父親がどんな意識でわが子を今後見ていくか。父親がどこにいるかということ世間にいる。肩書きや出世や名誉、そういうところにいる父親がびびる言葉は、要は世間からそういう意味で子どもが事件を起こすぞというのが、効果的だと感じることもある。

(委員) おっしゃる意味がよくわかる。当事者の親は相談に来ることがあるだろう。そして学習する機会はあるだろう。でも、そうではない一般の父親や母親が、認知症もそうだが、一般の方にどれだけ理解をしていただくかというところが肝になってくると思う。例えば、保健所がやっている赤ちゃんが生まれるときに、親になるための勉強会がある。自治体によって違うが母親学級とか父親学級とか。世代が上がってからのことになるから、違うかもしれないが、何か触れる機会というものがあるのかと思った。

(委員) 登校しぶりの前の、もう生まれたときの生きづらさから本人の SOS を家族がどうやってキャッチしてこられたか。その積み重ねだと思っていて、父親母親が気づいたときがそのときなのだろうと。早い段階でご両親が子どもを見る気持ちのゆとりや余裕があれば本当によいと思う。

(委員) 18 歳のとき、東京の予備校に通うために、愛知県の実家を出て、母方の祖母の家で同居した。祖母は、亡くなった祖父から DV を受けていた。積年の恨みが僕に向いたのか、こんなことを言うようになった。「あんたは若いからいいよね」「所詮、人生なんてつまらない。私は死ぬだけだから」という話を毎日 2 時間聴かされて、次第に心が病んでいった。両親は僕に対して理解を示してくれたが、祖母のことは全く話せなかった。

(会長) ひきこもりの方は真面目な方が多い。今も心配かけたくない、親への気遣いとか、そういうところで非常に自分を追い詰めていくというか、そういう印象を持った。そのようなところに相談や支援の手をどう差し伸べるのかというのは難しいと今お話を伺っていて感じた。

(委員) ひきこもっていたとき、太陽を見ると罪悪感を刺激された。みんなが働いたり学校に行ったりしている時間帯に「何もやっていない」という現実をつきつけられるような気がしたから。一方で月の光を見ると、心が落ち着いて、穏やかになれた。夜は静かに寄り添ってくれて、朝になるとフェードアウトしていくところに奥ゆかしさを感じられた。

(委員) 1年ひきこもったら1年は継続してやらないと駄目だと、10年の人はそれだけ世間から離れているので10年かかるとか、そういうふうに支援する側も覚悟が要るのではないかと思う。世の中に出るとどうしてもいじめられたりするので、そうするとひきこもりの時の良かったことや楽だった記憶というのは残っていて、すぐ戻ってしまいそうになるので、継続支援は大きな支援だと思ってやっていただきたい。

(会長) 親の関係等の啓発をやられているということだが、良識やどんな関わり方を現場でしておられるのか、良かったらいただけるか。

(委員) 私は保健所なので、心の病に関連する方の相談が多いという特徴がある。家族もやはり対応に困っていて、なかなか本人にお会いするまで、関係を作るまでは時間がかかると思うが、家族がどう対応したら良いかを相談できる予約制の家族の専門相談などを活用しながら、支援している現状だ。

(会長) 仕事のことやお金のこと等色々なことの不安で、親から相談があると思うが、そういう親との相談で、どんなことを今まで経験しているのか、教えていただけたら。

(委員) 私は親が子どものことを心配しているようなときほど、そっとしておいてほしいのではないかと思います。だから心配しているということをどんどんやると、もっと向こうに行ってしまうのではないかと。こちらに来てもらいたいというのを出せば出すほど、また向こうに行ってしまう可能性も高いけれど、さりげなく頼ることもあるから、それはさりげなく受け止めるというような付き合い方をしていけばよいのではないかと。だからあまり結果を早く出そうというか、早く自分が安心したいというのが見えてくると嫌だというふうに子どもは言うと思う。悩んでいるとき成果が欲しいから、どうしたらいいのだろうという答えを早く出したい。逆に相手にとっては、それが見えてしまうから、気持ちはわかるけれど、そこは気をつけた方がよい。でもそこで少し突き放すことで、その子どもと付き合っていける関係ができるのではないかと、そんな考え方を提案した方がよいと思っています、私も心がけている。

(会長) 解決を急がないということか。なるほど。

(委員) やはり日本人の特徴は、いつまでも親子関係が続き、死ぬまで続くという感じがあって、それは良い面もあるし悪い面もあるが、親が自分で解決しようとしてしまう。それは実は本人の課題を解決するのではなく、自分の不安や変化が見られるものを解決したいということであると、心理学者のアドラーが「課題の分離」と言っている。本人のためと思っていても、それは自分のためだったということがよくあるので、それがすごく難しい。やはり自分だけで解決しようとしなくていいことが大事。本人がどうやって動き出せるのかというのは、正直親がいくらこんなものがあるよと言うよりは、ひ

きこもりの人たちの使える選択肢を社会的に沢山用意しなくてはならない。それはオンラインでできることもあれば、短時間労働もあるし、例えば障害年金というのものもある。使える制度はたくさんあるのに、ひきこもりの人はそういうのすら知らない人が多い。アウトリーチで第三者を入れることと、本人が動き出せる選択肢を増やしていくことが重要だと思う。

(会長) 副会長何かあれば一言。

(副会長) 話は戻るが、5月にある市で支援者対象の研修会をやったときに、架空の事例をめぐって、子どもに辛くあたってしまう父親のことをどうねぎらうかを皆で考えたことがあった。そして、ある受講生にその父親役になってもらい、ねぎらいの言葉を皆で伝えて、どんな言葉が響いたかを話してもらった。すると、「本当は息子とキャッチボールがしたいのではないかと、自分が働いている背中を見せたいという思いがあるのではないかと、という言葉がすごく響いた」と言われていた。困った父親と周りが思ってしまう人ほど、やはり父親自身も傷ついたり、辛さを持っていたりするというのを改めて思った。本音のところでは、子どもに謝ってほしいという気持ちを持っている方もいて、傷ついている。大人の男性は、あまり自分の弱い部分や傷ついていることを話す機会がない、話す文化がないところがあって、封印しながら頑張って生きておられたりするが、実はそういう父親たちも自分の弱い部分を安心して話せることがすごく大事なことだと思う。それを子どもに直接出すのではないとしたら、ではどうするのかといったときに、家族会がある。たとえばある市で「おやじの会」を主催している方が、「家族会の構成は、母親が圧倒的に多く、父親がとても少ないことが多いが、母親がいっぱいいるところでは今ひとつ共感できなかったり、自分の話や本音の話ができなかったりすることもあるから、親父同士で話せる場が飲み会でも何でもいいから、すごく必要」とおっしゃっていた。それから、家族の中に困難が生じたときにどうすればよいのかを家族が学ぶ機会がまだまだ少ないと感じる。子どもを育てていくプロセスのところから、たとえば学校段階に応じて、そうした学びの機会が保護者対象にたくさんあっても良いと思う。特にそのときにポイントになることは、辛い感情についてどう触れていくのか、接していくのかということ。子どもから辛い感情や傷ついたことが出てくると、その親も不安になるので、その不安を打ち消そうとして子どもに接してしまいやすいが、そのときに大事な対応は、むしろその気持ちを認めて、安心できるようにすることなので、「辛かったね」とか「大変だったね」という言葉が大事である。いわゆる問題解決とはアプローチが全然違う。問題解決の発想になっているときは、脳の中で思考や判断を司る大脳皮質という部分が働くが、感情の傷つきを司っているのはもっと奥にある大脳辺縁系という部位なので、そのときに大脳皮質から働きかけても、相手は「わかってもらえない」という逆の反応になってしまう。大人になってひきこもり状態になっている方は、相談しても無駄だという体験をいっぱいして、SOSを出せないでいるので、そういう体験が積み重なる前に、相談したらわかってもらえるんだな、寄り添ってもらえるんだなという体験を子どもの頃からたくさん積み重ねていく必要があると思う。保護者、学校の先生、子どもに触れる機会がある人みんなにそういう理解が広まっていく必要があると思う。

(会長) 今までの議論をまとめていただいたと思う。感情がしんどいときに頭で考えろと言われても、受け止められない。反発が強くなってしまう。まさに副会長のおっしゃる通りだと思った。

(委員) 皆さんのご意見を伺っていて、やはり家族の支援はここまで大事なのかと改めて感じた。支援の対象者はひきこもっている当事者だけではなく、家族も含めて対象者であるということで、丸ごと支援していくことが窓口にとって大事なことだと感じた。相談内容を改めてみると、やはり色々な生きづらさや辛さを解消したいために、窓口に繋がる方が多いが、最終的には自分がどうなりたいか、そんな自分になるためにどういう支援ができるか、一緒に寄り添ってやっていくかというところまでいければ、終結が見えてくるのかなと、そこを探っていくのが支援者として必要なのではないかなと思う。どうしても行政だと治ってほしいとか、こんなふうになってほしいと押し付けがちだが、そこをこらえて、本人がどういう自分になりたいかというところを見つけられるのが一番良いのではないかと今日感じた。

(会長) 今日は継続的な相談や支援ということの一つキーワードにしながら、皆さんから話を伺い、家族や本人の相談という中で色々な意見が出たと思う。これをもって、令和6年度第1回ひきこもり支援協議会を終了する。

閉会